

会 議 録

会議の名称	平成24年度 第3回豊中市図書館協議会		
開催日時	平成24年(2012年)11月13日(火)19時~20時30分		
開催場所	豊中市立岡町図書館 集会室	公開の可否	可・不可・一部不可
事務局	生涯学習推進部 岡町図書館	傍聴者数	5人
公開しなかった理由			
出席者	委員	大野 俊介 舟岡 直子 曾谷 昌 鶴川 まき 中川 幾郎 塩見 昇 村上 泰子	
	事務局	羽間生涯学習推進部長 山羽生涯学習推進部次長 堀野岡町図書館長 木村庄内図書館長 山本岡町図書館主幹 中田岡町図書館副館長 前川高川図書館長 江口岡町図書館副主幹 松井岡町図書館副主幹 西口岡町図書館主査 小堀岡町図書館主査 上杉岡町図書館主査 石田千里図書館主査 磯上野畑図書館職員	
	その他		
議題	<ol style="list-style-type: none"> 1. 豊中市立図書館の中長期計画—グランドデザイン(案)について 2. 図書館評価システムについて 3. その他 		
審議等の概要 (主な発言要旨)	別紙のとおり		

平成24年度（2012年度）図書館協議会

日時：平成24年（2012年）11月13日（火）19時～20時30分

場所：豊中市立岡町図書館 3階集会室

出席者：（敬称略）

委員 大野 舟岡 曾谷 鶴川 中川(委員長) 塩見 村上

事務局 羽間 山羽 堀野 山本 木村 江口 中田 前川 小堀

石田 上杉 磯上 西口 松井

開会

資料確認

委員交代の紹介

委員（欠席者）の紹介

●事務局

当日配布資料の、平成24年9月定例会のお二人の議員の個人質問については、グランドデザインに言及されている部分があるため、委員長から参考資料として配布依頼があり用意した。ただし、この資料は図書館協議会事務局が、市議会ホームページの音声ファイルから筆耕したもので、公式の議事録ではない。あくまでも、文責は事務局にあり、引用などされる場合は、公式な議事録からお願いしたく、取扱いにはご注意をお願いします。

●委員長

皆さん、こんばんは。

いつもの通り始めに図書館協議会の運営方法について委員の皆様にご了承いただきたい。豊中市の図書館協議会は原則的に会議を公開しており、本日も5名の傍聴者が来られている。傍聴の定員は10人となっているが、希望者が定員を超えた場合、傍聴していただく人数については、そのときの状況を見ながら私の方で判断させていただくということによろしいか。

なお、傍聴の方にはアンケートをお願いしており、協議会を傍聴されてのご意見等を伺い、特に皆様にもお伝えすべき内容をご報告する。

次に前回の会議録について、事前に送付させていただいたものについて特に委員の皆さんから修正等の意見はなかった。公開の際には概要という形で発言者について個人名は掲載せず、委員と表記するのでご承いただきたい。

それでは議題1ということで、最初に「豊中市立図書館の中・長期計画グランドデザイン（案）」について事務局から説明をしていただきたい。

●事務局

事務局で前回9月11日の協議会のご意見を元に、豊中市立図書館グランドデザイン10月4日案を作成し、配布させていただいた。また別にお配りしている資料としては、お二人の委員からいただいた

グランドデザインについての意見と、事務局からの今後の加筆修正予定の部分についての資料を元に本日はご意見をいただければと考えている。

その前に加筆・修正の部分について簡単に補足説明をさせていただく。まず1に関して、なぜグランドデザインかということについては、これから数年で10人程度の定年退職者が見込まれることや、再任用職員で対応するとはいえ、中・長期の人材採用方針もあり、新規採用が厳しい状況にあることから、経営の効率化や人的資源の再配置が求められているという部分について。また図書館事業が「新・豊中市行財政改革プラン」の中で重点課題の15の特定事業の一つとして位置づけられており、あるべきサービス水準やコスト等を明示した図書館事業のあるべき姿、到達年度およびその間の取り組みの工程を明確にし、公表していく中でグランドデザインを策定することになったということについてである。

また現時点でお示しすることはできないが、このグランドデザインを最終まとめる際には、人的状況の見通しについても提示していきたいと考えている。

次に3の、指定管理者制度（部分委託のあり方を含む）についての検討を始めるということについてですが、参考資料にもあるように、お二人の議員さんから9月定例会で指定管理者制度に関する質問があった。平成17年3月に図書館協議会からいただいた提言「これからの豊中市立図書館の運営のあり方」から8年近く経過していることもあり、グランドデザインの中に盛り込むことにした。ご議論をよろしくお願い申し上げます。

●委員長

資料については事前配布されたので、お目通しいただいていると思うので、各委員からご意見をお願いしたい。ご発言の際は必ず挙手していただいて、マイクを使ってご発言いただきたい。順番にどうぞ。

●委員

前回グランドデザインについて、いくつかの項目を検討したが、前回も気になったのがICタグ活用に関してで、前回はそれに対する効果について、何の目的のためにICタグを導入するのかというところが、少し不明確であったような印象を持った。お送りいただいた資料の中では、タグの活用によって資料の整理時間を減らし、その分休館時間を減らし開館する日を増やすということが書かれていた。具体的にこのような効果を期待するということが明確に書かれていると、非常に納得感があるというふうを感じる。成功事例としては、例えば箕面市でICタグが導入されたという記事も読んでいますが、それによって年間の図書購入費を2倍に増やしたというように書いてあった。人件費の件も先ほど述べられたようなこともあるが、そういった効果自体が非常に多岐にわたるので、明確にそこは記述していただくとわかりやすいと思う。最近図書館協議会の傍聴に議員の方々が来られるなど、注目も非常に集まっており、そういうところをもっと明確にしていってもいいのではないかと考える。

●委員

このグランドデザインに関しては、私ともう一人の委員の二人の連名で意見を出している。いつも議会で図書館に関する質問が出た時は、インターネット等でチェックしているが、今回は議会の方をチェックするのがちょっと後になり、議会でのやりとりを知るより前にこの意見を出すことになった。

先ほどの委員は、「成功事例としての箕面」というふうにおっしゃったが、私は逆に、箕面は市民自治

条例などを筆頭に、市民の自治ということが高くかかげ、豊中より先に要望されて、市民活動とか市民の自立とかをとっても大事にした条例を出されたところであるにもかかわらず、図書館というものをどうとらえるかという視点が全く弱いと思う。それを成功と言ってよいのか。図書費が増えたことを成功だととらえるのか。そうではなくて例えば鳥取県とか島根県のように、市民自治ということ、市民自治を実現するためには、一人ひとりの個人が自分で考え自ら行動し、政策とかそういうことも自ら考えて律していくという、そういう個人の自立というのがとても大事な要素になると思うのだが。豊中市でも市民自治基本条例を採択し、議会を通っているわけだが、その時に図書館をどうとらえるかということについて、「知の拠点としての図書館」というとらえ方を、鳥取県などはそういうとらえ方をしている、指定管理者制度とかそういうものから図書館をはずしている。それによって逆にとても豊かな図書館の運営がなされていて、箕面とは全く逆の行き方をして成功している。それが国・文部科学省等にも影響して、文部科学省からも図書館をもっと地域の大事な財産として考えるようにという考え方が、最近いろいろ示されている。

その時に、豊中がどうなのかということを取り返って考えるが、私としては議員さんが議会で質問されたように、図書費がとても削られていて、それが図書館運営に影を落としているということは事実だと思う。今日お休みの委員が所属されている豊中子ども文庫連絡会は、毎年毎年図書費を増やしてほしいとずっと要望してきている。そして、図書館もそれに対しては努力されていると聞いている。だから私達が、図書費について、かつて図書館協議会でも話題になったが、協議会でそのことを全く議論しなかったというのは当たらないし、市民はずっと図書費の増額を希望している。そのことを一つ言っておきたい。それから豊中では、私は逆に図書館を愛する市民の立場から、もっと積極的に「知の拠点としての図書館」というものを早く構築してほしいと言い続けてきたと思う。そのことと学校図書館の絡みもあり、豊中の図書館は他の自治体の多く、主として関東が中心だが、図書館を全く大事に考えないでとにかく民間に受託させるというような流れに対して、市民としては、ただ今ある図書館を守る為に市民として働いてきたのではなくて、そうあってほしい図書館を望んでずっと活動してきた。それが私達図書館に関わる市民活動なので、「人件費がさほど変わっていない。だけど図書費はこんなに下がっている。だから窓口業務は指定管理。」という短絡的な発想については、本当にそういう考え方にはなじめないというか、もっと積極的に図書館を活かすために、今の図書館の状態ではだめだし、もっと市民も力を出して、本当に知の拠点としての図書館運営ができたらと、一番強く思ったことはそのことである。

グランドデザインに関しては、意見を書いているので、これ以上申し上げることはない。

●委員長

別紙の資料を見ていただいたらいいということによろしいか。

●委員

私の方からは、少し個別の点について述べさせていただきたい。

ひとつは前回、それからグランドデザインについての二人の委員からの意見の中にもあったように、豊中市立図書館評価システムで積み上げてきた図書館の将来像というものと、それから今回出された豊中市立図書館グランドデザインとの関係がどのようになっているのかということが、いちばん大きな疑問点だった。これに関しては、先ほど館長からこの辺りはもう少し書き足すということが語られたので、

それをまた見させていただいて、その後にも意見を言わせていただきたいと思う。それから IC タグなどの情報通信技術の導入の件に関しては、2か所出てくる。ひとつは最初の目標のところ、「最新情報技術の導入により、利便性を向上させ多様な情報の提供をする」というところで、「レファレンスやフロアでの利用者対応を強化するため、IC タグ導入によるセルフ貸出・返却・予約受取を可能にする」という箇所である。もう一か所は後の方のグランドデザインの28の戦略という中の、後ろの方だったと思うが、「F. サービスを届ける戦略」の17番目、18番目のところにセルフ貸出の話や、「ICTを活用した高水準のサービスを提供する」という部分が出てくる。前のほうの目標のところは、あくまでも目標ですので、あまり具体的なことについて言及する必要はないのではないかと思います。たとえば電子書籍配信、それから音楽配信サービスを導入するというようなことが、目標の中でも設定されているが、このあたりは何も電子書籍や音楽配信に限った話ではないと思うので、もう少し広く「電子的なコンテンツの提供、ネットワークを通じた提供を進める」というような書きぶりでのよいのではないかと。具体的には当面どうするかというところで、たとえば電子書籍の配信などが出てくるのは良いかと思うが、そのへんを書き分けたほうがいいのではないかと思った。

それから「図書館職員の行動指針と求められる資質」というのが大項目の4つ目に出てくるが、その直前に数値目標というのが非常に唐突に出てくるような印象を受ける。この数値目標というのは、登録率を現行より20%上げるということだが、むしろこのあたりは、前段の図書館の目指す姿、これからの豊中市立図書館の目指す姿あたりで、例えば学びの循環を考えたり、自主学習の視点を考えたり、相互に学びあう拠点を目指したり、というような目標を達成した結果として、市民の賛同が得られ、市民に愛される図書館となった、ということで結果として20%UPに到達することを目指すんだ、というその中に溶け込ませたほうがむしろ良いような印象を私は受けた。どうもグランドデザインの持つ4つの目標の後に、数値目標として登録率を20パーセント上げるという、この数字だけが何か突出しているというのはいかたがたではないかという気がする。

それから、少し元に戻るが、先ほどの1、2、3、4、という4つの目標のうちの2番目の、技術の問題というのは、もう少し順番として後ろに下げたほうがよいのではないかという気がする。と言うのも、1番が「市民と地域のつながりと学びの循環を支える」、それから3番が「市民の利便性や地域課題に対応した施設の配置と運営をめざす」、4番が「学校図書館の支援を通じて子どもたちの学びの基礎づくりを支える」と、わりと大きな目標を立てられている。それに対して、「最新の情報通信技術の導入により、利便性を向上させ多様な情報を提供する」というのは、目標のすべてにかかわり、すべてをサポートするものだというふうに考えられるので、2番目よりも最後の方が良いのではないかと思った。私からは以上である。

●委員

ちょっと忙しくて全部に目を通しきれていないのだが、全般的なことと言わせていただくと、グランドデザインは10年後の豊中市立図書館の将来像ということだ。課題があって、それに対して図書館のめざす姿・将来像があって、具体的にそれをどうしていくかということが書かれているのだが、できれば10年という年限で豊中市立図書館をどうしていくかということなのであれば、スケジュールのようなものがあったらいいのかなと思う。いついつまでという細かいスケジュールは難しいと思うが、だいたいどれくらいまでに、ここに具体的に掲げていることをやっていくかということがあれば、一般の

方々が見ても、あと何年たったら図書館ってこうなっていくんだなということが分かるのかなと思った。今更ながらこれを言うのは申し訳ないのですけれども。ある程度、これらを具体的にどれくらいまでにやっていくのか、10年後には全部出来て、どういう姿になっているのかが分かれば、より良いのかなと感じている。それから中身について言うと、ちょっと自分が読めていないのかもしれないが、アウトリーチと言うか、図書館に来られない方に対するサービスみたいなことがどこかにありましたでしょうか。障害を持っている方とか高齢者とか、来館するのが困難な方に対して、どんなふうに情報提供していくのかというのが、ちょっと見当たらなかったもので、このへんも少し考えていただけたらなと思った。

●委員

私は学校の立場から資料を読んで、学校図書館にどのように支援があるかという視点で見た。3か所に書かれていた。その中で、学校図書館コーディネーターの配置を考えていただいているということだ。仮称ということだが、そういう形で学校を支援してくれる人が専任でいるということは、学校の立場からはとてもありがたいと思う。学校に学校司書という形で担当者が配置されて年数が経ったが、内容がどの程度充実してきているかという、まだまだ課題はたくさんあると思う。それをコーディネーターという形で、例えば学校に入ってもらって、A小学校の学校図書館活用はどうだとか一緒に考えてもらって、学校の中での学校図書館を関係者と共に考えてもらって、公共とつないでもらえるというのはとてもありがたいし、学校の教員もいろいろと入れ替わりがある中で、そういう立場と同じ視点で学校に入ってもらえるというのは、豊中全体の学校の学校図書館活用が同じラインにそろっていく可能性があるなと思うので、こういう位置づけの人がいるというのは、すごく学校としては良いなと思った。何か所かそういうことを書いていただいている。そしてその方が学校教育の内容に関して熟知してもらっていると、なお良いのではないかなと思う。その1点だけを今日は言いたいと思っている。

●委員長

二人の委員の連名で出されている、グランドデザインについての意見があるが、これは事前配布されていたので、皆さん見ていただけているということですのでよろしいですね。

●委員

まずは、館内で職員の皆様がいろいろと協議を重ねて28の戦略に表現されるような、これから目指す方向をまとめあげたということで、これをやっという話なので、あまり協議会委員その他が、外からあれこれ申し上げるべきことでもない。要らないことが書いてあるわけではないので、「がんばってくださいよ」ということになるわけだが、ただ今日議会の資料が配布されたように、なかなかシビアな状況があって、それに対するやはり危機感があって、こういう仕事を進めてきたということを後になってお聞きしたりすると、そのへんで今後補足する予定の中に、なぜ今これをやらなければいけないかというあたりをもっと書き込むという話ですから、それはそれでそういうものがあつたらいいと思う。そういう状況の厳しさに対して、長年つみあげてきた豊中の図書館の活動を守ると同時に攻めて、これから開いていこうというところの集約が、このデザイン案になっているのだろうと思う。そういうふうに見ていくと、いくつかそのこと故の難しさというか矛盾、連年の悪さみたいなものがやはりあるように思う。前回にもすでに出ていたと思うし、二人の委員の意見書の中にもあるが、キーワードとし

ては、まだ図書館との縁を結んでいない多くの市民の人達に・・・というので、これが登録率の20パーセント上昇を目指すということになっていくわけでしょうけれども。要するにまだ使っていない人達とどう接点をつくっていくか、そして地域の課題に取り組んでいこう。地域に出かけようということで「出かける」というのが今度のキーワードとしてかなり大きな要素になっていると思う。「出かける」ことが、地域とより一層切り結んだ図書館につながるかという、ちょっとなかなかストレートにはつながりにくい。ちょっと飛躍になるのではないかという感じがする。一方で、ICタグの活用というのは、限りなく館内における無人化に近づくという印象が強い。ユーザーとのきめ細かな接点となる場所としては、フロアだというのが、この場合のフロアは、カウンターに対比したものとして用いられており、カウンターの外に出ることが示されている。フロアに出ていると利用者が話しかけるのを待つ、あるいは進んで話かけていくということはあるとしても、やはり一番ユーザーが図書館に対して問いかけ、そしてそこからいろんなことへとつながっていくのは、やっぱりカウンターという場所、資料を媒介する人と資料との接点の所だと思う。この部分を決して軽視しているとは書いていないけれども、ICタグ・無人貸出機に象徴されるように、そのところを極力省きながら、一方で対応をきめ細かくして外へ出ていこうと、そういうことになっている。それが本当にそうなるのかならないのか、かなり危険な部分を含んでいるのは確かでもあると思う。この違和感みたいなものをどうクリアして越えていくのかというのは、やはり全体にかかわるかなり象徴的なイメージかなと思う。

それから図書館イメージを、キャッチフレーズで表す件について。これもまた前回にも意見が出され、今回も他の委員から意見書で指摘もされている。キャッチフレーズで図書館活動を訴えていこうというのは、私は一つのやり方として良いと思うが、あまりにも奇をてらってしまうと、作った側と受け取る人達との間に、認識のズレが生じるおそれもあるだろう。それが共感とか共通認識になっていくかどうか。おそらくずいぶん苦労したうえで、この「好‘寄’心の駅」というキャッチフレーズがあるのだろうが、「好‘寄’心」の「寄」という字の置き換えについても、「駅」というイメージについても人によって受け止め方が異なるのではないかと。とくに、「駅」から連想するものは、人によってかなり違うと思う。「終末、ターミナル」という解釈もあるし、まさに四方八方に拡がって行く駅もあるし、そこで本当に人や資料が交流し、そこから何かが生まれていくという、「発信」みたいなことを含めた言葉として、「駅」というのが図書館のこれからをイメージする時の言葉として、適切かどうかという問題はあると思う。ただ冒頭申し上げたように、皆さんがいろいろ考えて、これが豊中の図書館のこれからののだと言われるのなら、あえて我々の方から異を唱えるつもりは私にはない。ただ、本当にこれから目指していく図書館像として適切かどうかということについては、少し疑問がある。

厳しい状況に対する対応的意味合いを持つ政策プランだ、というようなことをお聞きすると、じゃあそういう点から言えば、もう少し豊中の図書館が作り上げていこうとする、目指す図書館像みたいなものがもう少し端的に、あるいは大事なポイントがより積極的に提示されていいんじゃないかな、という感じがする。確かに28の戦略は、それぞれやったら良いことだ。なかなかこれらを全部やるのは大変だと思うけれども、それ自体はいいのだが、やはり図書館というのはこうなのだという部分についてももっと語られてもいいのではないかと。いろいろ今後の議論になるのだろうが、一部の議員さんからは、民営化なり指定管理を含むそうした方向性が欠けていると、そういうものを全然正面から取り上げていないというようなことが指摘されるらしいので、それでは公立図書館として、豊中市が図書館サービスを考えていくということはどういうことなのか、実はこういう状況こういう状態をこれまで作ってきた

し、これからも作っていくのだという風なところが、より端的に主張されてもいいのではないかと私は思う。そこまで踏み込んでも良いのではないかという感じもする。

それについては、今中身についてあれこれ申し上げはしないが、たとえばレファレンスについて、後から送られた評価表に、レファレンスの問題とか相互貸借の問題が出てくるが、ちょっとだけその委託とか民営化のようなこととの接点の話をする、大阪府立図書館が事業仕分けで、そういう問題と取り組んだのがほんの1・2年前だった。その中で、大阪府立図書館がやっている図書館事業というようなものを、かなりシビアに事業仕分けをやっていた上で、相当程度のことは民間にまかせてもいいじゃないかというようなことが出てきつつ、最終的には例えばレファレンスサービスというようなのは、これは民営化でできるものとは違うだろうと、仕分け人たちも図書館が責任を持って自力でやるべき仕事として認めた。認めた上で、その次に出てきたのが何かというと、しかしながらここまでのことを無料のサービスでやるのかということだった。やる必要があるのかと。まさにこれは図書館という事業をやるかやらないかという問題になる。言わば、やり過ぎではないかと。無償で提供するサービスとしては、ここまでやらないといかんものかと。ここまで行ったら、もうこれは対価を取ってやるという、そういうことの方にむしろ属するんじゃないかと。そのことを横に置いて考えれば、これはやっぱり民営化してどこかに託することにはいかんような仕事だと、そういう議論というか結論になっていった。それから相互貸借というのが評価表のなかにも上がってくるし、その状況がちょっと書いてあって、それとも重ねると、相互貸借は資料提供を補完するものと評価の中に書いてあるけれども、私は資料提供を補完するというレベルのものじゃなくて、むしろ図書館というのは、一つ一つの図書館が個別に自分の持っているもので、ある限りにおいて一所懸命提供し、ない分はリクエストとかなんとかでは対応するにしても、ないものはやっぱりないもんやというふうなところになりがちな部分を、いやそうじゃない、とにかく図書館の相互貸借で対応しようとする。隣同士の図書館、種類の違う図書館、都道府県域内、日本中、さらには国際社会まで広げて、要はあらゆる資料や知識や情報とういうのは、その一つ一つの図書館が窓口になって必ず応える。そのことを100パーセントできるかできないかは別にして、そこを目指す、それをやるのが図書館という仕組みなのだ。だからこそそれは、無料という対価を請求しないという仕組みがあるからこそ、実はできることなのだという、このへんのところが公的な図書館事業をやることの積極的意味合いだ。資料提供を補完するのではなく、どこかに言葉は出てくるんだけど、「あらゆる情報へのアクセス」。「あらゆる情報」というのは、ここではデジタルとかそういう情報の世界のことをやや意識して書かれてあるように思うけれども、およそ世の中に存在するあらゆるものに対してアクセスする。そういう仕組みが、無償の公共図書館なのだという。こういうものを、今までも豊中は当然目指してきたはずだ。さらにそういうものを貫徹して、さっき言った大阪府の方でも、「これは大変なことをやっている」と評価しつつ「でもそこまでやるのか」となった。結局これは、図書館という事業を本気でやるのかやらんのかという、最終的な判断につながっていくわけだ。そのように、限りなくレファレンスサービスに対応していく、あるいは相互貸借という形で、どこまでという限界なしに挑んでいくという、そういう仕組みというものは、これはやはりなにがしかの契約で請け負う請け負わないというような仕事とは根本的に質が違うものだ。そういう仕事は、実は豊中で目指しているところの姿だと。そういうことに近づいていくために、28の戦略というのがあります、というような形が、やはり必要なのだろう。危機感の意識は一方で持ちながら、しかしそこまであまり強く正面には出さないで作りあげた。それが、「出て行く」ことでこれまでと違うことを見つけ出して、ということに

なっているんだけど。でも、出て行ってそう簡単に見つかるというものでもないし、館内に居たらやれないという話でもない。やっぱり公的経費でやる図書館事業だからこそできることは何なのかというあたりを、やっぱりもうちょっと率直かつ大胆に言っていた方がいいのではないかという感じもする。それが今回の仕事ですることなのか、これをさらに展開していく段階での課題にするかということは、これはまた考えたらいいと思うが。そんなところで、諸状況に対する対応としてこの案が作られたということを知ると、それゆえにこそ少し中途半端なところというか、あるいはやや無理があるところというか、そんなことを思う。おおぜいによる共同作業だったから、いろんな思いがここに盛り込まれて、こうなっていたんだろう。一人が書くというのとは違う、共同作業のゆえの特徴だろうとは思いますが。やはりそんな感じがする。イメージについては、先ほど申し上げたように、この豊中の図書館の今後をアピールしていく図書館像のイメージとして、これが本当に非常に分かり易くて多くの人がそうだと共感するようなものかという、やや無理があるなという感じが私はする、というのが率直な印象だ。

●委員長

それでは私も一委員として発言権があるかと思うので述べたい。このグランドデザインを読んで、字数の制限があるのか、かなり文章的には短い量に納まっていると思う。これを見ながら、私は貴田委員長の時に出した答申、現下指定管理者制度はなじまないという答申を出したことが触れられている関係もあるが、あの頃からここまでどういうふうに図書館は変わってきたかと、今思い起こしている。

ああいう結論を出すに至ったのには、ひとつには、指定管理者制度をもし仮に導入したとするならば、という粗っぽいシミュレーションをした記憶がある。そうすると、ダブルコストになるという危険性を感じた、というのが当時の委員としての記憶だ。指定管理者制度を導入しつつ、片一方で正職である司書の再配置に向けた計画を立てて、その人達を何らかの職場配置に替えていかなければならないという、そういうことが起こり得るのかなということ。その時に指定管理料プラス、それらの配置換えに伴う人件費もそのまま残っていく。そのような状態で指定管理者制度に移行していくというのは、合理的ではないなという結論があつた時出たと思う。確かに僕にはそういう記憶がある。ですから、初めから指定管理者制度反対なんて言った覚えは一切ありません。指定管理を導入するならば、という分析をしたはずだ。その分析の中で出てきた結論がいくつかある。一つは、やはり行政評価、政策評価の対象として、図書館行政こそ最先端を切って政策評価の俎上に乗せていくことを覚悟しようやということ。効率性も経済性も、あるいは政策的有効性も含めて吟味できるような政策評価システムの上に図書館を乗せていこう、先頭を切ってやろうということを協議会の中から提案して、図書館職員も呼応して評価システムを作り上げた。それがひきがねとなって、豊中市の行政評価が進み始めたという経過、いきさつがあつたはずだ。そういう意味では、大変厳しい自己評価のシステムを作ったということが、このところに書かれていない。私はそれこそを書いてほしいと思う。そういう気持ちを持つ。それから、図書館評価のなかで、内部評価だけではダメで、やはり定期的に外部評価をしなくてはいけない、ということをご確認して、市民の皆さんからも、専門家の目からも、我々とは違う外部評価の仕組みを作らないといかんということを行った。その外部評価については、当時の首脳部の返事では、3年から4年ごとに採るように予算組みもしたいという答弁をいただいた記憶がある。まあそのことにはあまり詳しく触れる必要はないかもしれないが、あの指定管理者制度をめぐる議論がスタートラインであったことは事

実だ。ですから、指定管理者制度を全否定したような覚えなんか全くない。指定管理者制度を導入するならば、こういうことに気を付けねばならないということも、十分吟味して議論したはずだ。ただ、提言の中にはそれは詳しくは残っていない。たぶん会議録程度しか残っていないかもしれないけれども。ですから、そのへんの経過もちょっと書いてもらったほうが、誠実なのではないか。まったく議論していないかのような雰囲気・印象に取られたら、僕はちょっと心外だなと思う。

もう一つ、評価すべきところだと思ったのは、非常に図書館の職員にはつらく当たっている面があって申し訳ないが、まずこれだけたくさんある図書館が、各館ごとに地域課題に基づいた館の目標がないのはどういうことかと、かなり以前に申しあげた。それについては、地域課題に基づいた館ごとの目標を設定するという風に記載されているので、ようやくここに位置づいたなと思う。庄内の図書館と千里の図書館が同じ経営運営をやっているはずがない。地域コミュニティに立脚した図書館であるべきだということから言うと、これは正しい方向だと思う。

それから世代ごとにサービス対象を分けるということも、これも正しいと思う。それから、グループリーダーを置くということも、非常に踏み込みとしてはしっかりしたと思う。それから次に、常勤職員の年齢構成バランスを考慮した採用計画、これも結構議論した部分でもある。それから、人事交流が必要だということ、これも議論したことだ。それから、フロアマネージャーを置いたらどうかということも、これもいろんな提案から出てきた話だ。それから学校図書館を支援する人材を配置するということは、間違いなくこの協議会の中で、侃々諤々議論して前に進んだことだと思う。そして施設配置の最適化を図る、これも議論の中にあっただと思う。

最後に、マーケティング戦略というところで、これが、「地域状況などをさらに細やかに分析し棚に並ぶ資料に反映させる」という16番の一つだけなので、ちょっと足りないと思う。マーケティングという限りは、いわゆるソーシャルマーケティングですので、今回やられた市民アンケートとかもマーケティングだ。そういう広い意味での調査活動というのは、もっとメニューがたくさんあって、実際にやっているはずなので、これをもう少し実績に基づいて、出したらどうかと思う。

それからサービス向上という点では、私が気にしていたのは、市民の社会参加とか地域との関わりづくりを支援するというところとか、それから図書館サービスを具体的に例示してというところで、具体的かつリアルに書いてあると思うので、これまでの図書館協議会での議論や、各委員から出されている意見を、かなり忠実に反映する努力はしてくださったと思っている。ですので、あと望むべきは過去の経過について、図書館評価システムというのが作動し、それに基づいて内部改革もやってきているということにも触れたらどうか。なおこの評価システムというのは、ことのついでに言うと、経営の当然の常識であるコストを下げるといふことの努力、サービスパフォーマンスを上げるという効率性上昇の努力、それからどれだけサービスパフォーマンスを上げたところで、公益的な目的の達成ができなければ何の意味もない、ただの貸本屋になってしまうという、その公益性の確認と、公益性達成につながるようなサービスパフォーマンスを上げるという連結。そこのところを心棒に入れた方が良いかと思う。先ほどの委員がおっしゃったことと一部重なるかもしれないが、コストを下げるといふことは、日常的な努力の中で当然されるべきであって、民間であろうが行政であろうが同じことだ。サービスパフォーマンスに関して言うと、前も館長に直に申し上げたことがあるが、どうも図書館の職員は、内向きで、内気な方が多くて、ホスピタリティという点では訓練が足りていないような面がある。「こんにちは」と大きな声で言われたら「こんにちは」と返しはするが、パッと顔を見てすぐに「こんにちは」と向こうか

ら挨拶してこないじゃないかと。そういうことも、こういう民営化の議論にとっては、非常に逆風になるのだと。ホスピタリティという点、どこかに項目として入っていたと思うが、それも入れておいていただくと、かなり理解が深まると私は思う。そのような感じの印象を、持っただいだ。原案を支持するが、いくつか足りないあるいは加工修正してほしいところもある。で、いま全員からいただいたご意見を、私なりに箇条書きにメモしましたが、会議録も残っているので、それを元にもう一度書き加えるなり作業をしていただきたいと思います。

それではその件について館長から何か修正の提案なりご意見をいただければと思う。

●事務局

それではまず、タイムスケジュールを求められた件については、別紙として年次工程およびタイムスケジュール、人員構成の推移などをまとめて付けることができるかと思う。それと、アウトリーチに関しては、グランドデザインの中でも、公共図書館の使命・理念とか豊中市立図書館の使命あるいは基本目標などについて言及する中にあるが、細かな提示がないので、その点についても別紙などでわかるような形にしたい。初めてご覧になる方に分かりやすいものにするよう、対応を考えている。

それと事務局として申し上げたいことは、冒頭にも触れたが、9月の定例会で指定管理者制度に関する議会質問もあったことや、先の提言から8年経ったことでもあり、図書館としましては必要と感じており、また緊急性もあることから、今期から来期にかけて、「図書館経営における指定管理者制度（部分委託も含め）のあり方について」ご審議いただきたく、岡町図書館長として諮問させていただきたい。諮問書につきましては後日お渡しするという形にさせていただきたいと思う。よろしくお願いします。

●委員長

それでは、図書館のグランドデザインについて、もう一度改めてご意見ご質問がありましたらどうぞ。いかがでしょうか。

●委員

図書館活動に関心を持って、子ども文庫から出発したが、豊中というところは、とくに文化遺産がたくさんあるわけではなし、やはり人を教育すること、人をどう育てるかということが、私達市民活動をする者たちにとってもすごく大きな活動の原点にあった。そういうことでずっと図書館とも関わってきた。それこそ何年前までは、本当に図書館もまだあちこちにはなかったし、従来通りの図書館という感じで、半分戦いのようなやり取りをしてきた。日曜開館とか時間延長とか、それこそ市民は何も持たないが、そういう図書館であってほしいと願い続けてずっと活動をしてきた。指定管理者制度の問題が起きた時も、例えば窓口だけとか、もう雪崩を打って全国的にそういう状況が出てきた時に、本当に危機感を感じて、市民としてももっと指定管理という問題について考えてほしい、市民として考えないといけないというスタンスで、ずいぶん講演をしたり学習会を開いたりという努力をして、協議会でも議論された。その時は私は協議会委員ではなかったが、十分議論が尽くされて、当面見送るというような形になったと思う。その時点においても、図書館は豊中の行政の中でも、市民との協働に関しては一番と言っていいほど昔から、市民との関わりの中でネットワークを広げて、いろんな活動をしてきたと思う。それが十分かと言えば、ずっと不満はありながらも、でも市民としてはできることはする、そのか

わり図書館も努力してくださいよ、というようにやり続けてきた。豊中の建物としての図書館ではなくて、広い意味での図書館活動のネットワークというものを、私達の会の方で図示したことがあるが、それはすごいものがある。しかし、私達はそれで評価しているわけではない。何が足りないかという、さっき委員長や委員長代行がおっしゃったような、自分達はこういう図書館にしたいのだという「志」が足りない、ずっと言い続けてきた。こういう問題が起きた時に、市民としてできることがなかったのかと、本当に考えさせられる。やっぱり十年後こういう図書館でありたいと、豊中という、それこそ隣に大きな大阪市がある豊中で、「人を育てる拠点・知の拠点になりたい」「自治都市になりたい」そういう思いの溢れる図書館であってほしいとずっと願って続けてきた。またこのような問題が起こった時に、このグランドデザインからは、十年後こういう図書館でありたいという大きなものを感じることができないのが、市民としてとても残念な思いだ。決して味方をしているわけではなく、これほど議会で言われるほど豊中市自体が財政的にも大変な中、自分達がどんな図書館をつくっていくのだということを、しっかり語ってほしいし、図書館というはもっと有機体としての図書館なのですから、窓口だけ委託するとかで崩れていくことをすごく怖れる。

本当に議論を尽くした上での指定管理とか、そういうことだったら納得できる部分があるかも分からないが、それもされないのに、お金、コストパフォーマンス、特にお金で、人件費と図書費を比べて、こっちはこんなに変わってないのに、こっちはこんなに少なくなっているじゃないか、だから指定管理という、こういう短絡的な発想だけは絶対市民としては避けたいと思うし、私達としても議論を充分続けていきたいと思う。

●委員長

ありがとうございます。この件については、皆さん全員に発言いただいているので、この検証と合わせて、もう一度加筆修正するという事で、ご了解いただきたい。

それでは次に議題2、図書館評価システムについて、事務局さんからご説明を。

●事務局

6月の図書館協議会でもご説明させていただいたが、要綱で設置していた図書館評価システムの外部評価検討委員会については、10月1日に図書館条例が改正され、図書館協議会に属する部会として位置づけられた。それに伴い図書館規則も改正され、図書館協議会委員長が協議会に諮って指名し、部会長は部会に所属する委員の内から委員長が指名することになった。こちらの件については、後で委員長にお諮りいただきたいと思う。

それに伴う市民公募委員の募集状況については、四人の方が応募され現在選考中である。他の委員については、商工会議所と市民活動に関わる方に依頼中という状況である。部会の日程としては、12月乃至1月から3月まで、4回の開催予定である。

それと、具体的な図書館評価自己点検の中身に当たるものとして、お手元の平成23年度リーディング項目評価表は、作成中の案の状態である。鋭意作成していきたい。

また、3年間を振り返っての、自己点検評価報告書も現在作成中であり、若干遅れ気味ではありますが、鋭意作成してまいります。

また、外部評価に関わりますアンケート調査に関しては、市民アンケートについては、配布および回

収が終わっており、対象者数が3,500人、回収数が1,115人という数値になっており、集計中である。来館者アンケートについては、配布数は3,000枚。全館において4日間実施し、現在各館で入力作業中である。

●委員長

事務局からの説明に関して、皆様からご質問ご意見をいただきたい。この件も全員順に発言していただきますよう。

●委員

こちらの評価システムの表を見て、大変多くの項目にわたり非常に細かく調られていることについて、大変なご努力であろうと思う。非常に細かい点についてで申し訳ないが、2ページ目の蔵書状況、蔵書更新率という項目があるが、こちらが当初設定目標9.7とされている。この算出の仕方についてだが、受け入れ冊数足す除籍冊数の、蔵書冊数に対する割合ということになるんですが、これはこの式であっているのか。という風に思ったのが一点である。蔵書数は100万冊ほどあったと思うが、となると、下の蔵書新鮮度のような、小数点のような数値になるかなというふうに思うが、いかがでしょうか。他には、若者の本離れと言うか、いろいろなIT技術の普及もあって、さまざまな電子情報に触れる機会も多くなっており、ともすればゲームやインターネットなど、そういったところに小中学生などが時間をとられてしまって、読書の時間が少なくなってしまうというようなことについて、周りを見ましてもそういうような状況があって残念な思いをしているが、そのなかでも中学生向けに「YA!BOOKS通信」の発行を常に図書館でされていたり、例えば岡町図書館でもYAコーナーができたり、地道にそういった小中学生や若者向けに努力されていること、それによって子どもたちが読書の機会を増やしていけることについては、本当に私も一人の親として、そうあってほしいと望んでいる。私自身、市民委員として公募希望させていただいたが、その元々の志として、やはり親も子も一緒に図書館を通じて読書を楽しんでいきたいということがある。豊中市民としてもっと読書をする習慣が増えるといいなという気持ちがあって、応募をさせていただいている。そういう形で、いろいろな年代層の方たち、図書館を利用されている方は多いと思うけれども、ぜひ今後を担う若者に向けて、読書の機会を増やすような図書館からの発信みたいなところを、ぜひ期待したいという風に考えている。

●委員

レファレンスのところで「レファレンス件数は減少傾向にある」という風にかかれていますが、レファレンスをどうとらえるかということも、とても重要な問題だと思う。レファレンスを希望する市民はあまりないのに、今後の方針としてレファレンスにシフトするというのはいかがなものかという内容のやりとりも議会であったようだが、本当にレファレンスというのを本気でやっているのか、そのあたりでレファレンスのとらえ方はすごく違うと思うが、とても市民の利用者数の多い滋賀県とか、図書館がとてもよく機能しているところのレファレンス機能はいったいどうなっているのか、ぜひ他の自治体の、うまく機能している自治体のレファレンスのありようとかを、一度ぜひ調べていただきたいと思う。さきほど言われた読書、本を読むところとしての図書館という役割は、やっぱり重要なことだと思う。でもそれだけではなくて、これからの時代は、先ほども言ったように人を、子ども達をどう育てるか、あ

るいは人間の一生を通じて、どのように自立してものを考えて行動していく、そういう人を育てるかという意味でも、とても大事な役割をしていると思う。読書だけだったら、どうしても資料数にばかり注意がいく。もちろん資料数は大事だ。しかし、窓口業務でにこにこして渡して、それで市民が喜んだら図書館はうまくいった、そうではないと思う。そのあたりのこと、もっと本質的な図書館の役割が大事だと思うので、このレファレンスサービスというの、減少傾向にあるがって、さらっと書いていいのかどうか。このあたりの突っ込み方が昔から物足りなくて、ずっと言い続けてきたのですが、よろしくお願ひしたい。

●委員

各項目に当初設定目標というのがあるが、前回の設定目標と比べた時に、設定目標が具体的にどことは言いがたいが、下がっている部分と言うのがいくつかあったように思う。それが決してサービスの年次変化がそれに到達しないから下げたということではなくて、逆にかなり当初の目標を上回っているにも関わらず、目標設定が下がっているようなものがあって、そこはなぜなのか少し疑問に思った。例えば、「学校・幼稚園・保育所・子育て支援センターとの連携」というところの事業実施回数は、20年度から23年度までかなり伸びているが、22年度の設定目標は150で今回上がっているのが85、これは当初設定目標の方が古いという意味でしたか。どうなんでしょうか。それとも今回の当初設定目標が新しい数字で、もともと150という目標だったのを85に下げということなのか、数字が減っているところがいくつかあったように思う。以前の資料と比べた時にそう思った。それがなぜなのかということをお教えいただけたらと思った。

あとは、例えば大学図書館との連携なんかについては、6ページの一番下のところに出てくる、国立国会図書館や大学図書館への複写依頼というところで、今後の取り組みのところが、以前も可能性をさぐるというコメントだったかと思うんですが、このへんもう少し検討が進んでいるのであれば、その辺を書き加えられる方がいいのではないかと思います。

●委員

こちらの直前送付の資料には目が通せていないので、これだけ多くの項目で評価をするのは大変だなという印象しかないのだが。評価をしたことを次にどうやって活かしていくかということの方が大事だと思うので、その辺りを意識して、具体的な評価に対してどう考えてどう取り組んでいくかということ、やはり循環させていく必要があると思う。中身についてはちょっと言えないので、すみません。

●委員

私からは、一か所についてコメントさせていただきたい。項目6番の「学校・学校図書館への支援と連携を推進しているか」のところで、目標数値を達成していない、むしろ低くなっている。減少しているところ、これの分析について書かれているが、学校の中でいろいろ蔵書が増えたというのも一つの理由になるのかよく分からない。また、活用に関しては、もっとこういう支援ができますよというような、発信というか宣伝というか、そういうことが大事だと思う。これは図書館側だけの問題だけじゃなくて、学校側の問題もあると思うが、もっとこんな風に図書館を利用してくださいというような取り組み、今回「調べ学習パック」というセットを作られたが、ああいうものをもっと宣伝することで、「ああこんな

便利な物があるのか」という風になれば、学校ももっと使うようになるかもしれないというように思いながら、ここのところだけ見せていただいた。やっぱりたくさん使うことによって、ああ図書館っていいなあ子どもたちには知ってほしいと思うし、こんな便利な使い方ができるということを子どもたちが知ってくれたらいいと思うので、そこはもう宣伝かなと思う。

●委員

手元に届いたのが昨日だったので、また細かい字でたくさん書いてあるので、なかなか集中して読むのが大変だ。たまたま目についたところについてということで、部分的な指摘にとどまるが、見せてもらいながら、どうなっているのかなあと考えた部分は、リクエストそれから貸出の増減、レファレンス・資料案内の件数、そういうところに絡むのだが、リクエスト総数・提供件数が増えているという。特にWEBで65%を占めるという。どこの図書館でもこれが増えているとは聞いているが、全リクエストの65%。カウンターで職員に直接言ってくるのは、主にデータがまだ入っていないようなもの、新しいものについてカウンターで申し込むのが多いんだというように要約してある。資料提供というのが、そういう形にそうとう收拾していつているのかなあと思いつつ、これを徹底したら、ものすごく無機質な資料提供になると思った。要するに、何があるか分かっているものについては、データを家から見て、「これ」と申しこんで、それを取りに行くという貸出。またデータに入っていない、OPACで出てこない本については、行って職員に聞くと言う、こういう形にどんどん特化していくのか。そうすると、さっき出てきたICタグを入れて無人貸出機で、基本的にはその部分については職員が介在しなくても、むしろ利用者が自分で、図書館員の目を意識しないで、借りたり返したりできるという、かなり無機質な仕事というのに段々なっていくのかなあ、そういう傾向がこの数字に出ているのかなあということが、ちょっと気になりながら、相当利用の多い貸出の多い豊中で出てきている傾向かということで、ちょっといろいろ考えてみたい、そういう気がする。

レファレンスというのは、統計件数的にはなかなか掴みにくく、そう多くないと同時に掴みにくいものだ。前から一体何をもってレファレンスと見るかということについては、確かにレファレンスそれ自身の重要性はあるけれども、量的にとらえるということは非常に難しい側面がある。その上に評価項目にはもう一つ、資料案内の件数がある。こっちは相当多い件数があがっていて2万とか3万という万の桁数だが、資料案内というのは確かに資料案内の項目としてあがっているのは事実なのだけれども、数えられる問題かなという風な気がします。館内に来て、何とかの棚はどっちですか、あっちですみたいな感じの事も、資料案内ととらえるのか。あるいは医学の本はどこにありますか。二階ですか、三階ですか、そういうことはもちろん大事な案内に違いないが、バスに乗ってこのバスはなんとかへ行きますかと問うと行きますよと運転手さんが答える、そのことと機能としては基本的に違わない。そんなことをいちいち運転手さんが数えているはずはない。ある意味じゃ当たり前の話なのでね。そのレベルのものを、本気で数えようとしたら、案内もほどほどにして、数え落とさんように正の字を書くのか、ボタンを押すのか分からないが、その数を採るというようなことは、果たしてどういう意味があるのか。何を持ってそれを指すのか、このような評価項目を設定しておいてこんな言い方をするのは変だが、あらためて出てきた数字と、それからもう少し事柄の内容に立ち入るレファレンスの方はなかなか数えきれないと一方で書いてあると、大事な方よりもはるかにごく当たり前の方の件数を数値化して、そのことを分析対象にするというようなこと自体がどうなのかと気になってくる。本気でやると、これはもの

すごく労がかかる問題だと思う。労多くしてどういう意味があるのかというあたりね、ここはちょっとやっぱり考え直した方がいいかなという感じもする。存外そこからは、件数の問題よりも、いろんなことが生まれてくるということ、そういう方ははるかにはるかに大事な部分なのだが。そういうところが少し気になる。それから相互貸借については、先程少し申し上げたように、資料提供の補完というより、私はもっともっと本質的なもので、相互貸借がこれこれの数字にならなくてはいかんとか、あるいはなっていないのはこれがこうだからという風にはなかなか言いにくいとは思いますが、相互貸借という方式自身が、図書館が一つ一つの単館の壁を越えて、図書館という組織ならではの仕事をする上での本質的な方法・中身を表していると考えます。「ちょっとうちにないから借りるで」という、そういうレベルでの相互貸借という風に、この説明では見えるような書き方なので少し気になった。

もう少し読むと他にもあるかもしれないが、まだ十分読めていなかったもので、このくらいにしておきたい。

●委員長

一回り全員の発言が終わったが、ここまでのご質問に対して事務局からどうぞ。

●事務局

まず、蔵書更新率につきましては、非常に誤解を生みやすい記述になっていて申し訳ありません。これは単位がパーセントですので、修正したい。正確には0.097になり、単位はパーセントである。当初設定目標値については、少し前の協議会でも取り上げられたと思うが、元々評価表の開始時点で数年先に向かって、評価のサイクルを一回回すその到達年度の目標値というのを掲げたうえで、そこに向かって各年度取り組みを進めていき、その数値が各年度どうであったかということを書いていくようにしている。当初設定目標値というのは、途中で見直しをしておりますので、たとえば先ほど例として挙げていただきましたところで言いますと、学校へのという7ページの項目は、当初設定目標値が85と設定されていたものが、79という時に85を目標値に掲げ、これは例えば子ども読書活動推進計画の進捗や学校図書館との連携にどんどん取り組んでいく中で、ぐっとはるかに当初の目標値を飛び越えてしまって大きな数値になっていったと。それで1サイクルの間で、目標値をさわっていないがために、こういう表現になったということで、前年この表をつくりました時には、今よりもっとわかりにくい表現だったので、今回当初に設定した目標値であると、多少とも伝わるように言葉を換えたつもりだったが、表そのものの見え方からどうしても誤解を生むのかなと思いつつ、今のご指摘を伺った。表現のしかたについて、「当初目標設定値」を掲げる場所など、もう一度考えてみるべきかと思った。

また、レファレンスについては、我々といたしましても、レファレンスに関してはカウントできない、しにくいという部分があって、統計の捕捉率をどう上げていくかということも課題だという風に考えているところである。

●委員長

このリーディング項目表にある図書館評価検討委員会というのは、これは内部組織を示しているのか、外部組織を示しているのか。

●事務局

このリーディング項目表などの自己点検評価については、図書館の内部組織で行うが、外部評価としての評価部会は、図書館協議会の部会という位置づけとなる。

●委員長

図書館評価検討委員会は、図書館協議会の下部組織、部会になるということで、リーディング項目表にあるのは、外部組織のことですね。なぜ確認したかということ、21年度に4回やっていて、22年度23年度は0回になっているので、これがどちらの検討組織のことを指しているのかと、一瞬思ったが、これは外部の委員会のことですね。ということは、21年度にこの図書館評価システムをもう一度ブラッシュアップして、完成に向けて作業をしたということが記録に残っていると、こういうことですね。

それでは、ただ今ご説明いただいた図書館評価の自己点検評価以外に、外部評価をしなくてはなりません。先ほど館長から説明されたが、図書館条例および規則などが改正されて、図書館評価システムの外部評価検討委員会は、この図書館協議会に属する図書館評価部会として位置付ける、という風になることになった。ですので、協議会の中から、部会に所属する委員および部会長を指名しなければなりません。そこで、村上委員に外部評価の部会長をお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。前から外部評価のアンケートなど、いろいろ設計していただいているので、お願いをしたいと思う。それから松田委員。このお二方に、外部評価の協議会からの委員をお願いしたいと思う。

そのほかに、市民公募委員がここに参画されるわけで、4人の方が応募しておられるということだが、その他にも、商工会議所と公益活動に関わる方ということで、人選をしておられるということである。部会の日程としては、12月もしくは1月から3月まで4回程度やっていただいて、外部評価を再度していただくということで、お願いしたい。

ただ今の、部会長と当協議会から出す部会委員については、ご了解いただけるでしょうか。ありがとうございます。

それでは、もう一度確認をしておきたい。

グランドデザインの案については、全委員の発言を踏まえたうえで、もう一度加筆修正をするということと、指定管理者制度（部分委託も含めて）のあり方については、これをグランドデザインの案にも入れるということと、それから図書館経営に関わるコストの問題、サービスパフォーマンスの問題、公益的使命を達成する社会教育機関としての役割、これを鮮明にもっと出すべきだという観点を加筆するということであった。プラス、協議会の方に館長から諮問事項として、「指定管理者制度のあり方（部分委託も含めて）」ということで答申を出すということが今、言明されましたので、後日公文書でいただくということになる。以後のこの協議会の審議討議の中身に、そのテーマがまた一つ加わったということである。もうご承知のように、この協議会は館長の諮問機関ですので、館長の方から諮問があればお受けするということである。今まで諮問がなかったので、その件については議論していなかったということ、言い訳になるが。こちらから建議することもできることはできるのですが。それでは、そのような方向を確認して、その他に入らせていただいてよろしいか。それでは、その他何かありましたら、どうぞ。

●事務局

その他、「とよなかブックプラネット事業」関連の行事について申し上げたい。

今年度のブックプラネットの流れについて、限られた時間ですが、簡単にこの間の経過報告をさせていただきます。昨年度詳細設計をし、人・物流・情報のネットワークをつくっていくということで、いろいろ取り組みをしてきた。昨年度の詳細設計に基づいて今年度は、「情報」の部分では、豊中版学校支援システムというのを構築するというので、現在業者を決め豊中オリジナルの部分も入れた、学校図書館の支援システムを今構築中である。2月くらいにはキックオフができるよう取り組みをすすめている。「物流」についても、学校間で相互に蔵書が見られるということで、学校間の相互貸借も増えるということで、3学期以降物流を増やすということで検討しており、あるいは公共図書館からの学校支援ということでは、庄内幸町図書館を支援ライブラリーにしているが、そちらの方に教員向けに特化した資料を置き、授業支援をするというようなこともすすめている。それから「人」の方につきましても、先ほどコーディネーターの話もありましたが、今後学校と公共の図書館の連携をさらに強めるということで、コーディネーターの配置ということについて検討するとともに、学校内の体制についても、さらに強めていかななくてはならないと、さらに検討していけたらと思っている。そういった動きの中で、教育委員会としてできることとしては、学校への啓発活動ということで、今優れた環境ができつつあるので、それを使ってさらに読書活動を活発にしたいということで、今年度2月には、子ども向けのフォーラムを開きたいと、計画をしている。それに向けては、二つの大きなプログラムを考えている。一つは昨年子ども達が投票した「好きな作家」の上位に入った方に、子ども達の方から手紙を書き、お越しいただいてワークショップをしてもらうという企画をしている。現在1,815通くらい子ども達が手紙を書き、作家の方にお送りしている。1名の作家に来ていただいて、ワークショップをしていただくが、その他の方についてもなんらかのメッセージを送っていただけるように働きかけて行くつもりである。それからもう一つは、やはり調べ学習を強化していきたいということで、「知的探求合戦一めざせ！図書館の達人」という名称で、12月25日に実施することを決めている。図書館の休館日に、子ども達を図書館に集めまして、調べ学習のプロセスを体験させるという半日のプログラムである。そこで、図書館を使った学習活動をしてもらって、そのなかで「達人」として選ばれた子ども達に、2月のフォーラムの中で、図書館を使った調べ学習をして発見したことということで、図書館の使い方の発見、それから調べて分かったことの発見、そういったところの発表をしてもらえたら、というふうに考えている。繰り返しになりますが、作家のワークショップと、調べの達人の報告という2本立てで、2月16日の土曜日にフォーラムを開催できたらと考えている。

●委員長

以上で一応審議事項は終わったが、今後の審議検討事項および方向性も含めて、何かご意見ご発言がございましたらどうぞ。ございませんか。それでは、第3回豊中市立図書館協議会を閉会する。それでは、傍聴の方々からも何かご発言ご意見がございましたら、賜りたいと思いますが、ございませんか。それではこれをもって終了とする。